看護職者としてのキャリア形成の考え方

——経験からの語り

森田敏子（もりたとしこ）
熊本大学医学部保健学科・教授

いま（2009年６月），26年前の父からの手紙（1983年11月１日付）を読み返している。月命日に仏壇の引き出しに入っている手紙に目が止まった。手紙は，「森田敏子様　父より」で始まっている。手紙には，「お申越の証明書，同封します。さて，来春大学へとの希望とのこと，日に日に進歩する心意気には敬意を表します。…（中略）…敏子の今回の決心は，まことに尊いものと思います。どうかあくまで初志を貫徹されることを祈ります。幸い私もお母さんも身体は健康です。その点は安心して努力してください。10月31日夜記」と綴られている。父からの手紙は，私が看護学校の教員になって１年目，未熟さを自覚して大学進学を決心し，故郷の父に受験に必要な書類を依頼したときの返書である。私が35歳のときであるが，いま読み返してみても他界した父の愛情に包まれる思いがする。

さて，高校を卒業するとき故郷熊本大学医学部の教授になるとは想像さえしなかった私が，なぜその職位になれたのだろうか。どちらかといえば補欠人生だと思う私なので，不思議である。本稿で，私がどのようにキャリアを積み，今日に至ったのか，個人的な経験を語ることによって，看護教員のキャリア形成の考え方の一助になれば幸いである。

看護師から看護教員への転換

１．新人看護師時代のノートづくり

看護師人生は，卒業した看護学校の母体病院である国家公務員共済組合連合会立川病院で始まった。外科系希望の私は，整形外科と産婦人科の混合病棟に配属された。未熟さによる不安はあったが，モーニングケアや環境整備，イブニングケアを徹底して行う病院だったこともあって充実していた。看護体制は，部屋持ち看護と，検温係，注射係，包帯交換係という機能別看護が併用され，それらの看護業務を落ち度なく行うことに懸命であった。

そのようなスタートを切るなかで，「看護体験日記」と題したノートを作った。ノートに患者の全体像や治療の目的，ドレーンの位置，どのような状態のとき患者が疼痛を訴え，看護師は何をしたか，どのような反応として効果が観察されたか，といったことを自由気ままに記述した。ノートに書き記すことによって，事例をとおした解剖学や生理学，病理学を確認したことになる。患者の全体像と関連図，問題点の抽出と看護経過，医師との意思疎通などをつづった記録である。ノートに書くことで，何が大切で，何を判断するのかなど，少しずつ見えてくるようになった。残念ながらこのノートは現存

していないが，今，このノートがあれば，学びの宝庫になったのではないかと思う。最も効果を発揮したのは，患者の状態の見通しによる予測である。“そうか，患者が，このような病気でこのような治療を受けたならば，ケアのポイントはこれになる”“看護師はこのとき患者の家族を含めて援助する必要がある”といったことが次第にわかってくる。

ノートは，新人看護師時代の２年間の財産であると同時に，看護師の判断根拠を示すものでもあった。ノートに記すことは事実を事実として見つめる訓練であり，解剖学や生理学，病態学など学問との照合作業による理解を深め，患者がどのような状態になったときに医師に報告し，先輩看護師たちが看護をどのように行うのかを見つめることになった。看護学生時代とは比較にならない大きさと深さで看護の視点を培う素地を得ることができた。キャリア形成の始まりは，患者を理解し看護判断する力，看護実践する力を育てることではないかと思う。

２．看護師からの逃避

新人看護師である私は技術的に態度的に，まだまだ未熟だった。産婦人科には子宮がんや卵巣がんの患者が多く，末期がん特有の悪臭を放っていた。患者は食欲もなく栄養不十分で低たんぱく状態になり，るいそうによって骨盤や尾骨の骨に皮が張りついている悲惨さでベッドに横たわっていた。やせ衰え苦しむ患者に，離婚を迫る夫や，行方不明になる夫がいたりする。このような患者が抱える苦悩に，看護師はどのように支援できるだろうかと考えさせられる日々であり，胸にこみ上げる辛さがあった。

ある日，個室の半開きのドアの隙間から，酸素吸入している卵巣がん患者の呼吸が異常な苦しさを呈しているのが見えた。一瞬どうしようと躊躇したが，いま行っているケアを優先させ別の患者の部屋に行った。「個室の患者の呼吸状態が悪いから対応してほしい」と，別の看護師に伝えることができたにもかかわらず，それをしなかった。どのくらい時間が経ったのか，個室の患者が危篤になっていた。慌ただしく看護師や医師が部屋を出入りし，まもなくして患者は息を引きとられた。“もし，呼吸が異常だと気づいたときに対応していれば，こんなにもあっけなく他界されることはなかったかもしれない”という思いが私を苦しめた。看護師として責任のなさを自覚した私は，自己嫌悪に陥ってしまった。

「理想の看護をしたい」とか「理想の看護がない」などと軽々しく言葉にしてしまう自分に嫌気がさし，理想の看護師像と未熟な看護師である現実の私とのギャップに戸惑い，看護師を辞めようと思った。辞めて何になるという見通しもなく，自己を見失ってしまい，とにかく現実から逃げ出したい一心だった。看護師失格者と自己判定して退職し，半年の間，いくつかのアルバイトを経験したが，どの職業も私を満足させなかった。それどころか，それらの仕事さえ満足にできない自分がいた。思い出すのは，看護師時代に出会った患者である。あの患者は今頃，元気だろうか，痛みに苦しんでいないか，吐き気に耐えているだろうか，呼吸が苦しくないだろうか，患者の苦悩に寄り添っている看護師としての私の夢をみることさえあった。そして，呼吸困難で逝去された患者の看護を果たしえなかった苦しみを，別の患者の看護に託して償えるならば，看護師としてやっていけそうな気がした。心機一転，新しい看護師として以前の私を乗り越えたいと思った。

看護師としての再出発は，友人の勧めである病院からとなった。看護師としての初日，張り

切って環境整備を行おうとすると，“待った”がかかった。翌日，何日も入浴されていない患者に気づき，清拭や洗髪をしようとすると，また待ったがかかった。“なぜ？”と不思議だった。時間になると配膳する，与薬する，注射する，包帯交換する。この病院の看護スタイルは医師の介助か，決められた時間に決められたことを行うのである。先輩看護師に，「なぜ，患者が必要としている清拭や洗髪など，日常生活過程を整える看護をしないのか？」と尋ねてみた。先輩看護師は「そういったことは付き添いに任せておけばいい」と言う。ここでの看護は，医師の介助が優先され，指示待ち看護が尊重されている。看護師の看護の必要性の判断など不要なのだ。果たしてそれが看護なのか？　看護をしたいと思い直して再就職したのに，“看護とは何か”という疑問が湧き，あまりにも主体性のない看護にため息をつくばかりであった。

3．看護の再発見

看護師が看護師として自律して看護活動を行うには，その方略や知識を獲得しなければならないと気づき，勉強する必要性を感じはじめた。看護師として実践力を身につけるには，看護部の組織が確立している病院で働くことである。看護師が看護師として自律して看護を実践している病院は，どこにあるだろうか？と思いめぐらせ選んだのは，自宅に近い武蔵野赤十字病院（以下，日赤病院）であった。日赤病院では最初の２年間は外来看護師として勤務した。当時，外来看護は事務的作業が多かったが，外来看護のすべてを任されたため，私が考えるように看護を展開することができた。外来患者の顔と名前を覚え，患者に必要な生活指導が自然に行えるようになっていった。予診を取り，前回受診から今回受診までの間の生活の様式から改善が必要なポイントや患者の悩みを事前に聴取してカルテに書き込むことで，医師の診察時間が短縮され，待ち時間の解消に貢献した。外来患者からの相談も増えていった。外来看護において，患者が早く回復することを願い，看護本来の目的である患者の生活の自立，社会復帰に向けて，看護師の立場から生活サポーターとしての役割を果たし，患者の精神的な支えとなることができた。この経験から，日赤では看護師が尊重され，看護師が良いと考えた看護が行える土壌があると実感し，看護師としての自尊感情を高めることができた。キャリア形成には自尊感情を高めることが必要ではないかと思う。

外来看護では飽きたらず，病棟勤務を志願した。希望はかなったものの，しばらくの間はわからないことが多く，医療，看護の進歩に目を奪われ，戸惑いの日々が続いた。看護の質を落とさないように気を配りながら看護基準を確認して実践するが，思うようには身体と心がついて行けず落ち込んだりもした。しかし，次第にたいていの看護は表面的には判るようになり，自分なりの見解をもち，看護を再発見していった。ちょうどこの頃「看護過程」「ＰＯＳ」「看護理論」などといった言葉を知った。このときの私は，看護理論を学問的に勉強する必要性を感じてはおらず，看護実践者として看護が提供できればよいという考え方であったと思う。

看護実践者から看護教育者へ

1．楽しかった実習指導に悩む

看護師として一通りのことをこなせるようになり自負心が出てくると，看護は楽しいと思えてきた。看護師として実習指導の役割が与えられたこともうれしく，看護学生が実習に来る日は一層楽しかった。学生には何でも教えたかっ

た。私が数年かけ苦労して身につけてきた知識や技術を，学生にすべて教えようとした。教えることにやりがいさえ感じ，看護学生が実習に来る日は張り切って指導した。

しかし，私が熱心に教えれば教えるほど，学生との距離を感じるようになった。「学生さん，今日は○○の検査があります」「学生さん，患者の容態が悪化しました。急変時の看護です」「学生さん，それをする理由，根拠は何ですか？」「学生さん，時間を浪費してはいけません。テキパキと行いましょう」「学生さん，○○です」「学生さん，□□です」。私の矢継ぎ早の指導状況に学生は戸惑い，不安になり，いまにも泣き出しそうである。私の指導の熱心さが学生に伝わらず，迷惑でもあるかのようである。私が熱心に教えれば教えるほど，学生は私から遠ざかっていく。“なぜだろうか？　実習指導が空回りしている”。

ある日，実習指導の責任看護師が私に言った。「森田さん，あなたはどういう態度で実習指導しているの？　あなたは，学生の“嫌われ看護師ナンバー1”の要注意人物らしいわよ」。私にしてみれば青天の霹靂，何がどうなっているのだろう。深く傷ついて悩みが襲ってきた。あんなに楽しかった実習指導が苦痛になってきた。“実習指導って何なの？　教えることって何なの？　私には，実習指導は無理なの？”素朴な疑問が湧いてきた。

2．看護教員として大学院生として

学生実習の疑問がきっかけとなって実習指導について学びたいと思い，学ぶ方法を模索していたとき，教員養成研修の存在を知った。厚生労働省看護研修研究センター（以下，センター）に補欠合格でき，とにかく研修生としての道が開けた。実は，看護学院も補欠合格だった。まさに補欠人生だと苦笑しながらも，学ぶ喜びに浸った。センターでの実習指導や看護教育についての学びは私にとって難解で，悪戦苦闘したが，学ぶことは楽しかった。学んだことの一つに「学習者の立場まで降りる。学習者の目線に立ち，共に学ぶ」がある。私の実習指導で欠けていたことである。「そうか，これだったのだ」と思い至った。

センターを修了した私は看護専門学校の教員になった。看護学生は与えられた課題をこなし，何と賢い存在かと驚かされたが，日が経つにつれて学生の別の側面も見えてきた。真面目で熱心な学生もいるが，居眠り，おしゃべりは日常茶飯事，看護を学ぶ意識の低い学生もいる。看護の感動を知らない学生もいる。“どうしたら看護の価値や意義を伝えられるだろうか？”と，また悩み，“教育とは何か”の壁にぶつかった。教員としてやっていくには未熟すぎることを自覚した私は，教育学を本格的に学びたいと思った。センター時代に，玉川大学に通信教育があり働きながら教育学が学べることを聞いていたことを思い出した。これが大学で教育学を学ぶ決心をした経緯であり，冒頭の父の手紙につながっていく。

さて，教育は講師である私（自己）と学習者である学生（他者）との関係をつくることから始まる。相互の人間関係をとおしてこそ教育が成立する。一方通行では教育は成立しない。私の実習指導は一方通行であったし，学生の意志や考えを尊重した教育的かかわりをしていなかったことに気づかされた。学生に自己成長させたいという気を起こさせ，意図的に高めようとする自己教育力を身につけさせることが必要なのだ。一方的に知識を注入しても，看護行動の模倣を押しつけても，容量以上のものは学習者の頭や心からあふれ出るしかない。学習進度

や学習レベル，既習学習内容を無視しては，教育は成立しない。単純なことから複雑なことへ，易しいことから難しいことへといった教育原理を無視してはならない。“学生と同じ目線に立ってどれだけの時間を共有できるだろうか？”という，教育者として考えるべきテーマが見えてきた。そして，授業のなかで看護実践を語れることは教師としての強みである。実践現場での体験がよどみなく披露できることは，看護教員としてのキャリアの基礎になっていると思える。だからこそ，キャリア形成には看護実践の経験が必要なのだ。

看護短大の教員となっていた私は，さらに学ぶ必要性を自覚し，大学院で学ぶ決心をした。働きながら学べる大学院を探していると，佛教大学に教育学研究科が開設されたというニュースが飛び込んできた。教育学研究科生涯教育専攻。私が，学びたいと思っていた教育に関するコースである。人間の一生を自己実現のプロセスととらえれば，一生涯が学びのときである。この大学院では土曜と日曜，夏期休暇中に学べるため，看護教員と大学院生の二足のわらじをはくことになった。大学院生としての学びはとても有意義で，課題研究の面白さを知り，学ぶ味わいを感じられた。

大学院で教育学修士の学位を得たことは，看護系大学の教員になるキャリアを積んだことになった。キャリアを積もうとか，キャリアのレベルアップを考えたわけではなかったが，それぞれの時代にそれぞれの環境において，自己の未熟さに対面し，課題解決の自己研鑽の方法として一条校で学ぶことを選択し，社会的に認められている学位を得てきたのだ。

3．博士の学位への挑戦

短大の教員として研究方法論が身についていないことに気づいた私は，医学部の研究生になった。研究生になった当初は，博士の学位取得など考えていなかった。とにかく研究について学びたかったのである。臨床検査医学講座に所属した私にとって21時から24時までの３時間が研究を学ぶ時間となり，中央検査室に通った。いま思えば，指導してくださった先生が毎夜，私に付き合ってくださったことに思い至り，感謝せずにはいられない。

まずは検査のイロハから身につけることになった。最初の課題は試験管など検査試薬を入れる容器の洗浄である。茶碗を洗うかのごとく簡単に考えていた私は，徹底的に指導を受けた。検査では，容器が清明でなければ物体の吸光度が正確に測定できないからだ。光の屈折率が重要なため，一点の曇りもなく洗浄しなければならない。

次の段階の試薬測定に進み，水を測る課題も簡単だと思ったが，なかなか合格点をもらえない。比重1.0の水を正確に１mL測定するために，小数点以下５桁までの1.00000という数字が求められるのだ。試験管100本分，正確に1.00000という数字が出るまで何度も測定しなおしである。96本まで無心に測定していても，残り２～３本になると邪欲が出てくる。“なかなか上手だ”と思ったとたん，測定が乱れる。リズムが整ってくると測定の再現性が高まってくる。粘稠度の異なるどのような成分の液体でも正確に測定できる技術を身につけなければならない。

次は，粉末の測定である。さらさらした粉末から顆粒，固形までさまざまである。エアコンの風や自分の吐息などわずかな空気の移動が微細な粉末の正確な測定を邪魔する。息を止めるほど神経を使って測定しなければならない。今日では，器械が測定するのだろうが，検査技術を駆使する研究では測定技術の獲得は必要不可

欠なのだ。やっとのことで，次の反応に進むことができたが，ここまで来るのに２年が経過していた。

この経験で学んだことは，一歩一歩進んでいくこと，あきらめないことである。何事にも根気強く真摯に取り組むことがキャリアにつながったと思う。キャリアは，そう簡単に形成できたり，積み上がるものではない。まずは，基礎力を身につけることだ。基礎ができて初めて，次の課題への対応力が備わる。自分でも“これはできる”と自信をもったとき，他者（指導者など）から，“それはできる”と評価されるのである。

そして，キャリア形成で忘れてはならないのは，周囲の人々への感謝である。何事も自分一人でできるようになったのではない。自分の努力があったとしても，努力する勇気や環境を与えてくれたのは，周囲の人々である。感謝する心が伴って努力するからこそ，次の課題が示されるのではないだろうか。

さて，反応技術では適切な時間に適切量注入しなければ，正確な反応は得られない。何度も何度も繰り返し吸光度を測定しつづけた後ＯＫサインをいただき，新たな反応系に挑戦していく。このようにして４年が経過し，やっと新たな研究課題をいただくことができた。それからさらに３年の年月を経て，博士の学位が見えてくると，何とかして学位を得たいと思う。学位論文を書き上げるまでには，私を引き受けてくださった初代教授と次の代の教授，研究の直接的なプロトコール指導をしてくださった先生，実験アシストであり身近な相談者となってくれた大学院生，研究のイロハを叩き込んでくださった先生など，多くの方々の指導に助けられている。博士（医学）の学位を得たときは，喜びとともに感謝の気持ちで満たされた。

キャリア形成につながる探求心

私は，キャリアを積もうとして歩んできたわけではないが，そのときそのときの迷いや不安，疑問に立ち向かうことで，新たな学習課題を見出して挑戦しつづけたことがキャリア形成につながった。

看護専門学校の教員になれたのは，実習指導への疑問から教員養成コースの研修を受けたことがキャリアの資格を満たしたからである。短大の助教授になったときは，大学で学びたいと思ったことによって取得した文学士の学士が資格要件を満たし，専門学校での教員歴９年が評価され，いくつかの論文を発表していたことがキャリアとなった。大学の助教授になったときは教育学修士の学位を得ていたことによるし，大学の教授になれたのは博士（医学）の学位を得ていたことが大きい。キャリアを積むことが先にあったのではなく，悩みや課題があってそれに向かっていく心がキャリア形成に導いてくれたと思う。この道は単純ではなく困難が多かったが，多くの方々との出会いと導きによるものである。

現在の若い看護師や看護教員たちは，学ぼうとさえ思えば，どのような方向でも学べる道がある。看護実践者としての専門看護師や認定看護師，看護管理者，看護教員などたくさんの選択肢からキャリアを選べる時代である。自分が何をしたいのか，何が向いているのかを見つめながらキャリア形成ができることを願っている。

参考文献

1）森田敏子：医療系短大教員からみた生涯学習（３），生涯学習のすすめ（城ヶ端初子編），基礎学習研究会，1997，p.47-55.

2）Toshiko Morita：A History of Growth as a Teacher of Nursing, Journal of Global Studies, Nobel University, Nobel Group, 1995, p.85-97.